ひぐらし 全長5センチ。蜩は夏の終りの夕方、カナカナと寂しく鳴く

九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No.304

2017（平成29）年 9月 4日（月）発行

○1945（昭和20）年8月6日・9日、広島・長崎の原爆投下から72年。○今年2月に原爆文学者の**林京子**さん、3月被爆医師**肥田舜太郎**さん、5月には広島原爆投下の第一報を伝えた**岡ヨシエ**さん、反核平和運動に貢献された**谷口稜曄**（すみてる）さんが8月30日に、元長崎大学長**土山英夫**さんが9月2日に死去。●そうした被爆者の悲願で**「核兵器禁止条約」**が成立します。

講演や被災地案内で 護憲や原発の不条理を訴える

「原発建設と漁師生活」

事務局志賀勝明さん埼玉で講演会

6月11日、さいたま市下落合コミュニティセンターを会場に、事務局の志賀勝明さん**<写真>**が、約40人の「原発を考える埼玉の会」会員を前に講演。

1973年、国の原子力委員会は福島第二原発建設をめぐり、公聴会を開催します。30人中21人が賛成派で、反対の声は国・県・町・東電ぐるみでかき消されてしまいます。

その公聴会に、南相馬市小高区村上のホッキ貝漁師の志賀さんは、反対派の一人として出席。しかし「海が汚染される」と反対していた仲間の漁師たちは、次第に膨大な補償金のために腰砕けとなり、志賀さんは孤立無援になり、ホッキ貝も原発の取水が始まると砂地がなくなり、水揚げはゼロになる。そして3.11の大震災と原発事故が起きます。

津波で自宅も漁船も被災しますが、招かれて全国各地での講演や被災地の案内に励み、これまでの原発反対運動の状況や、原発の不条理を訴え続けています。原発周辺の浪江町や小高区に案内した人々は、6年間で4,300人にのぼり、そのお話は現実の体験に裏打ちされているので、大変説得力がありいつも好評です。

埼玉での講演は2時間にも及び、質疑応答も活発で、共謀罪や9条改憲反対の話題にも発展し、会場は大いに盛り上がりました。

（報告：小高区会員・埼玉県さいたま市在住 青田利幸さん）

川崎市「たかつ九条の会」3度目の南相馬市訪問

浜通りの視察と相馬野馬追祭を見学

川崎市高津区「**たかつ九条の会**」代表 **山本武彦さん**

▶7月29日、本会看板前で。翌日、野馬追祭の武者行列の勇壮さに、感動の声をあげる「たかつ九条の会」22名のみなさん。

7月29日、「原発被災地の福島県浜通り視察と相馬野馬追祭を楽しむ旅」と称して、22人がマイクロバスで川崎市を出発。いわき市で事務局の山崎健一さんが同乗し、浜通りを北上し視察。第一原発の近くまで行き、放射線量が7マイクロシーベルトと高いのにびっくり。そして浪江町請戸に立ち寄り、相馬市松川浦の旅館に宿泊。

翌30日、南相馬市原町区本町通りで、騎馬武者行列を目の前で堪能。子ども武者もしっかり行進していて感動的でした。午後は雲雀が原に。「たかつ九条の会」の旗を立てて観覧席へ登り、甲冑競馬と神旗争奪戦を見学。長い歴史の重みと、被災地の苦しみの中、南相馬市民が総力で復興に励んでいる姿に力強さを感じました。

さらに急遽、飯舘村に向かう。田んぼの中に汚染土をつめたフレコンバックが並ぶ。方法がないから山積みのままなのか、フレコンバックの耐用年数を考えると不安でならない。立派な村役場と対照的な風景でした。

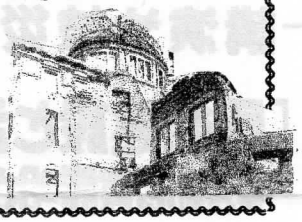
福島は植民地のようだと山崎さんは言う。しかし震災の2011年3月から、国会前では毎週金曜日に若者たちも集まり、「原発再稼働反対・安倍政権は退陣！」を叫んでいます。川崎市にも原発ゼロを目指した市民団体や、福島を支援する団体も粘り強く活動しています。私はこの流れとともに、微力ながら「九条の会」を広げていきたい。原町の皆様、大変お世話になりました。

唯一の被爆国の安倍政権は「核兵器禁止条約」交渉会議に不参加

＜広島・長崎の平和祈念日のことばなど＞

□「未来の人に、戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。一人ひとりの命の重みを知ること、互いを認めあうこと、まっすぐ世界の人々に届く言葉で、あきらめず、粘り強く伝えていきます。」**（広島平和への誓い・子ども代表 小6・竹舛直柔君・福永希実さん▲）**

■「（核兵器禁止条約の成立は）被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になったもの。条約をいかに活かし、歩みを進めることができるかが、今、人類に問われている。」「核の傘に依存する政策の見直しを進めてほしい。」**（田上富久・長崎市長）**



■「（核兵器禁止条約の交渉にすら参加しない）あなたはどこの国の総理ですか。私たちをあなたは見捨てるのですか」「今こそわが国が、あなたが、世界の核兵器廃絶の先頭に立つべきです。長崎の被爆者は満腔の怒りを込め、政府に強く抗議します」**（長崎県平和運動センター被爆者連絡協議会・川野浩一議長）**

原爆投下から72年　南相馬市にもいまだその影が・・・

父のことば「戦争は罪悪です」　南相馬市原町区匿名会員より

父は長崎で18歳で被爆

私の父は昭和2年生まれで、長崎神学校の生徒だった18歳で、昭和20年8月9日午前11時2分に被爆します。爆心地から南に4～5キロの工場に動員されていて、ガラスが肩に刺さった程度の軽傷でした。

その後、きのこ雲が空いっぱいに広がって、町が暗くなったことを覚えていて、また長崎市内の工場で被爆した校友たちが、ひどい火傷で帰ってきたそうです。石橋という友達は、「お世話になりました」と言いながら、父が手を握っているうちに亡くなったそうです。

そんな父の被爆体験談は、今から34年前の1983年に発行の『私も証言する』に掲載されています。

久々に読んでみると、その文の最後の所で父は、「戦争そのものが罪悪です。軍国主義の時代はもう二度と来ないでもらいたい。反核運動、市民運動で戦争のない社会ができれば理想ですね。」と話していて、今に繋がっているなと思いました。

現在と何も変わっていないように感じ、更にひどくなっているようにも思います。先人の思いを受け継ぎ、戦争のない社会を作らなければならないと感じています。

毎年この時期にしか考えないが、私は被曝二世ということをあらためて意識しなければならないと感じています。**＜右写真＞が、1983年発行の相双地方の被爆者20名の体験談集『私も証言する』。その後3.11の原発事故で避難した方が、20名中5名だけが確認されています。**

●その５名のなかに南相馬市小高区の**遠藤昌弘さん**がいます。**（本会報No.169・No.218・No.224に掲載）**

遠藤さんは20歳で広島の軍隊の病院で、８月６日午前８時１５分の原爆投下に遭遇し、廊下の壁に吹き飛ばされ、やがて「黒い雨」に打たれ茫然とした。その後脱毛や下痢などの原爆症に苦しみます。

戦後小高区に住み、趣味の俳句や茶道を楽しむ悠々自適の老後のはずでしたが、3.11原発事故で神奈川県に５年間も避難。原町区に借家し「小高の家に戻りたい」という願いも叶わず、今年3月5日91歳で亡くなります。この８月６日、広島原爆慰霊碑死没者名簿に記帳、奉納されたということです。本会会員でした。

「夏草や生きて原爆受洗の徒」梵天子（遺作）

9月の行事・会場は遠いですが・・

憲法を知り　今と未来に生かそう　主催 福島県九条の会

伊藤 真さん講演会 2017年９月２４日（日）13時～16時

会場：白河市・白河文化交流館コミネス大ホール

講師の伊藤氏は、1958年生まれ、東京出身。弁護士、九条の会世話人、伊藤塾（法律資格試験指導校）主宰、**＜参加券1,000円・事務局へ＞**